

21世紀COEプログラム 平成15年度採択拠点事業結果報告書

機 関 名	北海道大学	学長名	佐伯 浩	拠点番号	J02	
1. 申請分野	F<医学系> G<数学、物理学、地球科学> H<機械、土木、建築、その他工学> I<社会科学> J<学際、複合、新領域>					
2. 拠点のプログラム名称 (英訳名)	スラブ・ユーラシア学の構築: 中域圏の形成と地球化 (Making a Discipline of Slavic Eurasian Studies)					
研究分野及びキーワード	<研究分野: 地域研究>(地域間比較研究)(比較文明論)(トランスナショナル・イシュー)(社会構造・変動論)(国際社会・エスニシティ)					
3. 専攻等名	スラブ研究センター、文学研究科 歴史地域文化学専攻、文学研究科 言語文学専攻、教育学院 学校システム開発論講座(平成15年度～18年度:教育学研究科 教育学専攻)、経済学研究科 現代経済経営専攻、国際広報メディア・観光学院 国際広報メディア専攻(平成15年～18年度:国際広報メディア研究科 国際広報メディア専攻)、法学研究科 法学政治学専攻(平成15年度～16年度)					
4. 事業推進担当者	計 24 名 (延べ人数)					
ふりがなくローマ字) 氏 名	所属部局(専攻等)・職名	現在の専門 学 位	役割分担 (事業実施期間中の拠点形成計画における分担事項)			
(拠点リーダー)						
I E D A Osamu 家田 修 (55)	スラブ研究センター・教授	スラブ社会論・経済学博士	研究・教育プログラムの管理・運営・総括			
HAYASHI Tadayuki 林 忠行 (57)	スラブ研究センター・教授	政治学・国際関係論・法学修士	東欧中域圏の比較			
TABATA Shinichiro 田畑 伸一郎 (51)	スラブ研究センター・教授	ロシア経済論・社会学修士	中域圏の地球化、地球化と資源環境【研究プログラム担当サブ・リーダー】			
MATSUZATO Kimitsuka 松里 公孝 (48)	スラブ研究センター・教授	政治学・法学博士	地域の重層構造【国際協力担当サブ・リーダー】			
IWASHITA Akihiro 岩下 明裕 (45)	スラブ研究センター・教授	法学・国際関係論・法学博士	トランスナショナル研究、地球化と資源環境			
YOSHINO Etsuo 吉野 悦雄 (59)	経済学研究科(現代経済経営専攻)・教授	経済学・経済学博士	サブナショナル分析と微視的制度分析			
D A V I D WOLFF デビッド・ワルフ (47) 平成18年度追加	スラブ研究センター・教授	ロシア史・歴史学博士	シベリア・極東中域圏概念の歴史的変遷			
SIGIURA Synichi 杉浦 秀一 (53)	国際広報メディア・観光学院(国際広報メディア専攻)・教授	ロシア思想・社会学修士	社会思想と空間認識			
HASHIMOTO Satoshi 橋本 聡 (50)	国際広報メディア・観光学院(国際広報メディア専攻)・准教授	言語政策論・文学修士	言語と空間認識			
MOCHIZUKI Tetsuo 望月 哲男 (57)	スラブ研究センター・教授	ロシア文学・文学修士	ポストモダン文化【教育プログラム担当サブ・リーダー】			
TOKORO Shinichi 所 伸一 (59)	教育学院(学校システム開発論講座)・教授	ロシア比較教育史・教育学博士	文化の重層化と比較教育制度分析			
KIRIYUZAWA Takeo 栗生澤 猛夫 (63)	文学研究科(歴史地域文化学専攻)・教授	歴史学・社会学修士	複合文明としてのロシア・スラブ世界			
A N D O Atsushi 安藤 厚 (61)	文学研究科(言語文学専攻)・教授	スラブ文学・文学修士	スラブ文化の多様化			
YAMASHITA Norihisa 山下 範久 (36) 平成16～18年度	文学研究科(歴史地域文化学専攻)・准教授	社会学修士・学術修士	ポスト社会主義社会の比較文化論的分析			
U Y A M A Tomohiko 宇山 智彦 (41)	スラブ研究センター・教授	歴史学・政治学・学術修士	中央ユーラシアと隣接世界			
YAMAMURA Rihito 山村 理人 (53)	スラブ研究センター・教授	農学・地域経済論・農学博士	中域圏の社会・経済体制の相互比較			
MAEDA Hirotake 前田 弘毅 (36) 平成16年度追加	スラブ研究センター・講師	コーカサス(カフカス)研究・文学博士	イスラーム世界とスラブ・ユーラシア			
S A S A K I Takao 佐々木 隆生 (62)	公共政策学連携研究部・教授	国際経済論・経済学博士	地域統合と国際経済			
A R A I Nobuo 荒井 信雄 (60) 平成15年度追加	スラブ研究センター・教授	ロシア極東経済論・文学士	地球化と資源環境、極東中域圏の研究			
MURAKAMI Takashi 村上 隆 (62) 平成16年度死去	スラブ研究センター・教授	エネルギー資源論・文学士	地球化と資源環境【大学院生招聘プログラム担当サブ・リーダー】			
HARA Teruyuki 原 暉之 (65) 平成17年度	スラブ研究センター・教授	歴史学・国際関係論・国際学修士	シベリア・極東中域圏概念の歴史的変遷			
MORIYOTO Kazuo 森本 一夫 (38) 平成16年度辞退	文学研究科(歴史地域文化学専攻)・助教授	イスラーム研究・文学修士	イスラーム世界とスラブ・ユーラシア			
TAGUCHI Akira 田口 晃 (64) 平成16年度辞退	法学研究科(法学政治学専攻)・教授	中欧政治・法学修士	地域統合と政治・社会体制			
IYOTTE Eiichi 井上 統一 (67) 平成15年度辞退	スラブ研究センター・教授	文化人類学・民俗学・社会学修士	ポスト社会主義社会の人類学的・民族学的分析			
5. 交付経費(単位: 千円) 千円未満は切り捨てる () : 間接経費						
年 度(平成)	1 5	1 6	1 7	1 8	1 9	合 計
交付金額(千円)	80,000	90,500	91,300	97,890 (9,789)	101,000 (10,100)	460,690

6. 拠点形成の目的

本学は、昭和22年に国立大学最古のロシア語・ロシア文学講座を開設し、昭和30年にスラブ研究施設（現スラブ研究センター）を設置するなど、日本のスラブ研究をリードしてきた。現スラブ研究センターは全国共同利用施設として国内的にはもとより、国際的にも有数の研究拠点として評価されている。本プログラムを通じて世界のスラブ研究に刷新をもたらし、理論的にも実践的にもスラブ・ユーラシア（旧ソ連東欧圏）研究を確立・先導する拠点を本学に創出する。

以下、中間評価を踏まえた本拠点形成の具体的な達成目標である。

1. 動態論的地域研究及び中域圏に関する国際的な議論の喚起と方法論的な確立：平成15年度において中域圏論に関する基礎的理論を国内外に発信した（2004年1月9日 地域研究コンソーシアム設立準備ワークショップ「地域研究を？する」、2004年1月28-30日 国際シンポジウム「旧社会主義圏に生成する中域圏」など）。この問題提起に続いて中域圏を国際的に議論する場として、2004年5月28日 国際シンポジウム「21世紀のスラブ・ユーラシア研究の行方」、および2004年12月9-10日 国際シンポジウム「スラブ・ユーラシアと隣接世界の再編」を開催し、内外からの批評を受けると同時に、議論を深化させた。2005年度はさらに議論を国際的に広め、さまざまな視点からの批評を受けるために、世界学会である国際中欧・東欧学会（ICCEES）世界大会や全米スラブ学会（AAASS）年次大会において独自のセッションを設定し、中域圏に関する方法論的な問題提起を行ない、日本発信の分析方法の普及と議論の喚起を行なった。全米スラブ学会における2005年の共通論題はまさに本プログラムが掲げてきた変容する中域圏的地域論であり、本研究テーマが世界的な研究動向の最先端を走っていることが国際的にも証明された。こうした国際学会での発信と同時に、スラブ研究センターで開催される年二回の国際シンポジウムにおいて各論的なテーマを逐次設定し、地域研究と中域圏に関する理論的、実証的な研究を深める。2006年までに各論的な中域圏論に関する議論を終え、2007年には本プログラムを総括するために、学問分野と地域を横断するテーマを掲げて国際シンポジウム及び全国シンポジウムを開催す

る。

2. スラブ・ユーラシア学の構築：本プロジェクトでの研究成果を「スラブ・ユーラシア学」として構築するため、講座ものを刊行する。これは地域研究一般にとって方法論的な序説となるものであり、かつスラブ・ユーラシア地域の専門家を目指す学生の入門書ともなる。また個別的な優れた研究業績についてはスラブ・ユーラシア叢書を刊行する。北海道大学の大学院共通科目として2004年度にスラブ・ユーラシア学を立ち上げ、2006年度には、これまでの実績を発展させた体系的な講義を予定している。

3. 地域間の研究連携の促進：本プログラム及びスラブ研究センターは2004年に結成された地域研究コンソーシアムの中核的メンバーであり（会長及び理事）、コンソーシアムが個々の地域を越えて研究成果や研究情報、さらには研究・教育資源を共同利用化してゆく制度作りを強力に支援している。地域研究を推進するためには全国に点在する人的、物的資源をネットワーク型で結びつけることが不可欠である。地域研究はその性格上、強力な拠点作りと平行してネットワークを形成することが肝心である。本プログラムはスラブ研究センターが培ってきた実績に立って、日本におけるスラブ・ユーラシア関係の研究者を糾合する求心力となっており、とりわけ若手研究者が国際的な水準で研究成果を発表する要となっている。こうした拠点・プラス・ネットワークという研究体制を日本の地域研究全体が共有するようになることが地域研究コンソーシアムの基本理念であり、本プログラムは他の拠点型地域研究機関や地域研究関連の21世紀COEプログラムと連携して、シンポジウム開催、次世代研究者育成、情報資源共有化などを推進し、スラブ・ユーラシア以外の地域研究との研究の交流を図っていく。

4. 情報の発信力向上と情報共同利用化の促進：スラブ研究センターの国際的な研究情報発信機能を高め、同時に他地域との研究情報資料の相互利用を促進するシステムを開発する。本プログラムの中核組織であるスラブ研究センターの電子メディアは世界最高水準であると認知されているが、本プログラムの遂行を通じて、世界的な水準にある既存の情報発信力を発信内容の拡充などにより、いっそう質的に向上するよう努める。

7. 研究実施計画（中間評価を踏まえた計画）

平成17年度：

①中域圏研究の展開

- ・国際中欧・東欧学会(ICCEES)の世界大会(2005年7月ベルリン大会)においてセッションを組織した。
- ・全米スラブ学会(AAASS)年次大会(2005年11月ソルトレイクシティ)においてセッションを組織した。
- ・北海道大学において二回の国際シンポジウムを組織し、中央ユーラシアと東欧に焦点を当てて中域論を中心とする地域論について議論を深めた。
- ・「ロシアの中のアジア、アジアの中のロシア」研究班の研究成果を中間的に総括するシンポジウムを組織した。
- ・逐次、関連する地域認識や地域論の第一線の研究者を招聘して中域圏論の理論的な精緻化を図った。

②スラブ・ユーラシア学の構築

- ・研究の進展と調整を取りながら講座「スラブ・ユーラシア学」の巻別構成を決定し、執筆を開始した。

③地域間の研究連携の促進

- ・夏期国際シンポジウムにおいて地域研究コンソーシアム及び地域研究関連の21世紀COEプログラムと連携して、国際シンポジウムを開催した。また次世代研究者育成、情報資源共有化などにおいても、地域研究コンソーシアムと共同してこれを推進した。

④情報の発信力向上と情報共同利用化の促進

- ・新しいデータベースサーバの活用により、データベース発信機能の強化及び運用の効率化を図った。
- ・欧文校閲体制の改善及び出版業者との連携により、欧文出版体制を強化した。

平成18年度：

①中域圏研究の展開

- ・全米スラブ学会(AAASS)年次大会においてセッションを組織する。
- ・北海道大学において年二回の国際シンポジウムを組織し、ロシアとアジアの相互的な関係、ロシアと世界の関係に焦点を当てて、多様な観点から地域論について議論を深める。
- ・逐次、関連する地域認識や地域論の第一線の研究者を招聘して中域圏論の理論的な精緻化を図る。

②スラブ・ユーラシア学の構築

- ・講座「スラブ・ユーラシア学」及び「スラブ・ユーラシア叢書」の刊行を開始する。

③地域間の研究連携の促進

- ・地域研究コンソーシアムなどと共同して、研究成果の共有化、次世代研究者育成、情報資源共有化などにおいて、諸地域研究間の研究連携を推進する。

④情報の発信力向上と情報共同利用化の促進

- ・スラブ・ユーラシア地域研究の新たな境界を意識して『スラブ・ユーラシア研究者名簿』を刷新する。
- ・地域研究コンソーシアムなどと共同し、スラブ・ユーラシア地域関連情報資源の利用拡大を図る。

⑤大学院教育・若手育成の全学的運営体制の構築

- ・COE終了後の大学院教育・若手育成の全学的運営体制の構築について検討する。

平成19年度：

①中域圏研究の展開

- ・北海道大学において年二回のシンポジウムを組織し、専門分野と地域とを横断する総括的な地域論について国際的な議論の場と、国内的な議論の場を設定する。
- ・逐次、関連する地域認識や地域論の第一線の研究者を招聘して中域圏論の理論的な精緻化を図る。

②スラブ・ユーラシア学の構築

- ・講座「スラブ・ユーラシア学」の刊行を完了する。「スラブ・ユーラシア叢書」の刊行を継続する。

③地域間の研究連携の促進

- ・地域研究コンソーシアムなどと共同して、研究成果の共有化、次世代研究者育成、情報資源共有化などにおいて、諸地域研究間の研究連携を推進する。

④情報の発信力向上と情報共同利用化の促進

- ・出版物の有料化を視野に入れて、とくに海外への出版物配布体制を改善する。
- ・社会的汎用性の高いマイクロフィルムのカタログ作成により、保有する情報資源の利用拡大を図る。

⑤大学院教育・若手育成の全学的運営体制の構築

- ・COE終了後の大学院教育・若手育成の全学的運営体制の構築について具体的に検討する。

8. 教育実施計画

1. 21世紀COE研究員プログラム

35歳までの博士の学位取得者、もしくはそれと同等の資格を有する者が、非常勤研究員としてスラブ研究センターに滞在し、共同研究等に参加しながら研究を行う制度で、これまでの累計10名の採用者のうち、5名は北海道大学出身者で、他の5名は他大学の大学院(東京大学、東京外国語大学、大阪大学、慶応大学、一橋大学)の出身であった。1名は他大学(東京外国語大学)に助手として採用され、他の1名は奨学金を得てロシアに長期留学した。他の研究員も、すでに独り立ちした研究者として認められており、研究職にいずれ就くものと思われる。毎年、公募による募集が行われるが、この21世紀COE研究員への採用は、スラブ・ユーラシア地域研究においては、研究職への登竜門と見なされている。本学出身者以外にも広く開かれたこのプログラムは、全国レベルでの若手の育成プログラムとしてきわめて有意義なものといえる。

2. 若手研究者を対象とするワークショップ等

1) 本事業の「国際若手研究者ワークショップ」は、博士課程後期大学院生や博士課程修了者を対象とするプログラムである。報告者は公募により、外国からの応募も可能である。使用言語は英語で、国際シンポジウムと連続して開催されるので、同シンポに招聘された外国の第一線で活躍する研究者が討論に参加する。このプログラムによって若手研究者は自己の研究水準を確認することができるし、英語での発表、討論の技術を磨くこともできる。平成15～17年度にかけて、20名(うち8名が外国人)がこのワークショップで報告を行っている。このワークショップは、スラブ・ユーラシア地域研究を専攻する若手研究者が国際的な場にその活動を広げるための重要なステップとして、広く認知され始めている。

2) もうひとつの「次世代研究者ワークショップ」は、内外の研究者による最先端の調査・研究に基づく講義を提供するものである。聴講者は主に大学院生を想定しており、他大学の大学院生も参加できる他、研究職以外の地域の専門家にも門戸を開いている。

3) さらにCOEの枠内でいくつかの研究会が並行して組織されているが、それらはいずれも本学の大学院生だけでなく他大学に所属する大学院生、学振特別研究員を含む若手研究者に開かれている。

また、研究会によっては報告者を公募で選んでいるものもある。平成15～17年度にかけて大学院生、学振特別研究員を報告者とする研究会は22回開催され、39人の若手研究者の報告が行われた。

4) これらの一連のプログラムによって、若手研究者が最先端の研究にふれ、国際的な研究会の場で自分の研究を発表し、討論を行う機会は飛躍的に拡大した。全国共同利用施設であるスラブ研究センターを中心とする事業であるため、これらはすべて他大学に所属する若手研究者に開かれている。これは本事業の特徴となっている。また、それによって本学に所属する大学院生が全国レベルで最高水準にある他大学の大学院生との競争を意識するまたとない機会ともなっている。内容の充実を図りながら、これらのプログラムは事業期間中、継続される。

3. COE＝鈴木奨励研究員プログラム

これは、他大学に籍を置く大学院生に、スラブ研究センターにおける1～2週間の滞在研究の機会を提供するプログラムである。これまでの三年間で全国13大学から20名を採用した。うち私学は5大学5名、海外1大学1名だった。採用は公募により、おもに研究論文の審査に基づいて奨学生を選考している。これらの大学院生は博士論文を準備する過程で、スラブ研究センターが収集した文献資料を利用し、また本事業に参加する専門家たちの指導を受けることになる。これもまた、本事業の特徴である開かれた若手育成プログラムの重要な部分となっている。予算の許す範囲で、可能な限り多くの大学院生が、このプログラムに参加できるよう配慮しつつ、このプログラムも継続する。

4. 北海道大学の院生を対象とするプログラム

本事業では、北海道大学の大学院生を対象に1) 海外渡航助成、2) 学会報告助成、3) 国内旅費助成プログラムを実施している。スラブ・ユーラシア地域研究を専攻する大学院生であれば、所属研究科は問わない。これらは、現地調査、資料収集、学会報告等を目的とする短期の国外・国内旅行について、往復の旅費全額と滞在費の一部を助成するものである。また、本事業における研究プロジェクトの成果を取り込みながら、本学の大学院生が研究科の所属に関わりなく受講できる大学院共通授業「スラブ・ユーラシア学」を開講した。この授業は、段階的に授業数を拡大し、将来は履修プログラム制度として定着させたいと考えている。

9. 研究教育拠点形成活動実績

①目的の達成状況

1) 世界最高水準の研究教育拠点形成計画全体の目的達成度

目的は十分に達成された。具体的に以下の当初計画及び当初計画を越える目標が実現されたからである。

1. 中域圏論から出発して、総合的にスラブ・ユーラシア学を構築する研究体制が出来上がった。
2. 研究成果を学とするため、講座「スラブ・ユーラシア学」全三巻をとりまとめた。
3. 若手研究者育成事業により今後20年の日本のスラブ・ユーラシア研究を担う中核的グループが生まれた。
4. 地域を越えた組織連携として地域研究コンソーシアム発足を推進した。
5. 部局横断型大学院教育を開始した。
6. SRCのホームページへの1日平均アクセス数が約8千から約1万3千に増大した。
7. 北海道という立地性を生かし、地域に貢献する市民参加型の国際シンポジウムを開催した。

2) 人材育成面での成果と拠点形成への寄与

本プログラムの中核組織であるSRCは全国共同利用施設であり、本プログラムでも全国の若手研究者を対象とした拠点形成事業に力点が置かれた。具体的な全国型人材育成事業成果は以下の通り。

1. 21世紀COE期間中に、COE=鈴川奨励研究員制度を通じて全国から28名の大学院生が来札し、短期滞在しつつ研究を進めた。
2. 5回の国際若手ワークショップで36本の英文報告が提出された(外国人16本、日本人20本)。
3. 21世紀COE研究員を公募により全国から全期間で18名雇用した。
4. 21世紀COEの後半期に、若手研究者に国際学会で積極的にパネルを組織させる方針をとり、たとえば2007年11月の全米スラブ学会(AAASS)の年次大会(ニューオーリンズ)でSRCが組織した日本人報告8本のうち4本(50%)は36歳以下の研究者によるものであった。
5. COE期間中に、5名のPD研究員を受け入れた。最後の2年は毎年9人程度の院生が応募し、最終年には2名が採択されている(約20%の採択率)。

北海道大学の大学院教育における実績

1. 21世紀COE事業推進担当者が教育責任を負う院生のうち、19名が博士号を取得した。
2. 21世紀COEから、北大院生の海外調査を20件、海外学会報告を7件助成した。
3. 21世紀COEの一環として、毎年夏冬に大学院共通講義を行い、地域研究の方法論を他研究科の院生にも教育している。
4. COE期間中にスラブ社会文化論専修の博士課程院生は査読なし論文36本(うち欧文8本)、査読を経た論文を18本(うち欧文0本)発表した。COE期間中の博士課程院生の学会発表は63件(邦語47、欧米語16)だったが、その多くは後半に集中した。すなわち、平成17-19年度の学会発表は54件(国外8件)であり、これは本講座の院生の生産性が尻上りに上昇してきたことを示している。
5. 研究への参加を通じて学ぶ実践的な教育が行なわれた。たとえば、錚々たる著者をそろえた論文集『東北アジアの誕生』(北大出版会から近刊)を、27歳の院生が編集した。

3) 研究活動面での新たな分野の創成や、学術的知見等

1. COE期間中、極めて活発な研究会活動が組織され、出席者89-172名、報告数15-24の大規模な国際シンポジウムを計9回行った(報告総数176、うち日本人65報告、SRC専任教員11報告)。出席者30-50名、報告数6-25の中規模の国際的研究集会を計28回行なった(報告数287、うち日本人108、SRC専任教員16報告)。報告数6-27の日本語使用の研究集会を計26回行なった。そのほか、報告数1-5のセミナーを計216回(欧語使用102回、邦語使用114回)行なった。以上を元にして、30冊の欧文出版物(単著、論文集)、24冊の邦語研究報告集が出版された。
2. 本21世紀COEは従来の「ポストソ連東欧研究」という社会主義研究の束縛をうけた研究分野を、空間的にも時間的にも開放した「スラブ・ユーラシア地域研究」へと転換した。その具体的な成果は地域主体論、地域認識論、帝国論からなる『講座スラブ・ユーラシア学』全3巻(講談社)、および『スラブ・ユーラシア叢書』(北大出版会のシリーズ、現在までに3冊発行)の出版である。
3. 『中央ユーラシアを知る事典』(平凡社、2005年)、『中央アジアを知るための60章』(明石書店、

2003年)のような入門書・概説書の編纂にも大きく貢献し、研究の裾野を広げた。

4. 日露関係や国境地域問題で活発な社会的提言を行なった。たとえば日本島嶼学会と研究集会を共催し、新聞でも大きく報道された。岩下明裕教授の北方領土問題での提言書は大佛次郎論壇賞と日本学術振興会賞を同時受賞した。

5. 跨境論、帝国論のような地域研究の新理論や新方法を提案した。COE期間中方法論に関心を集中する国際シンポジウムを二回開催し、海外の学会でも方法論に特化したパネルを企画した。

6. 帝国論、空間表象論、跨境論など歴史・人文科学の方法を社会科学・現状分析に大胆に適用する人文地政学(cultural geopolitics)を開発した。

7. スラブ・ユーラシアと隣接地域の間の相互作用は本COEで初めて体系的に提案され、COEとは別に、SRCはこのテーマで平成17年度以降、特別教育研究経費(年284万円)を獲得した。こうした研究活動の成果は次のグローバルCOEに「新境界地域研究」として引き継がれる予定である。

4) 事業推進担当者相互の有機的連携

1. 本COEの中核組織であるSRCは比較的小規模で、全専任教員が出席する週1回の会議を軸として運営されており、もともと事業推進者相互の有機的連携が強かったが、本事業を通してネットワーク型連携が飛躍的に強化された。つまりSRCをハブとし、これに隣接地域の研究者や関連領域の研究者が機能的に連携する体勢が生まれた。しかもその有機的ネットワークは複数形成された。これによりSRCは、「スラブ研究センター」からネットワーク型の「スラブ・ユーラシア研究センター」へと実質的に飛躍した。

2. 全国的な事業展開および地域を越えた研究の実現に合わせてコンソーシアム型の組織連携が発展した。これは事業推進者間の連携を超えるものであるが、そもそも全国展開を前提として開始した本COEにとって大学の枠を超えた組織作りは不可欠であった。地域研究コンソーシアムはそのための基礎となった。現在は全国7組織がコンソーシアムの幹事組織となり、若手研究者が地域を越えて切磋琢磨することが日常化している。これは地域研究全体の発展にとってきわめて重要な前進である。

5) 国際競争力ある大学づくりへの貢献度

1. SRCは国内において唯一の総合的、学際的な

スラブ・ユーラシア研究組織であり、国際的にもハーヴァード大学やオックスフォード大学のロシア・スラブ研究センターと並び称されている。実際にもこの両大学の研究センターと協定を締結しており、COE期間中に提携関係の強化が実現した。

2. 本COEのイニシアティブによるパネルが国際学会において組織され、北海道大学がスラブ・ユーラシア研究の第一線にあることが強く印象付けられた。具体的には全米スラブ学会(AAASS)年次大会(2003-2007)および世界学会である国際中欧・東欧学会(ICCEES)世界大会(ベルリン、2005)でのべ15のパネルを組織し、日本人が計24ペーパーを発表した。

3. 北大はソウル大と毎年シンポジウムを開催しているが、SRCはこれに積極的に協力した。また平成20年2月にソウル大学と北大(ロシア研究所とSRC)が共催するシンポジウムに付随して、日韓に中国を加えて、日中韓のスラブ学会長が集まるサミットを開催し、東アジア若手シンポジウムなどの具体的な企画の実現が目指されることになった。

4. 国際中欧・東欧学会(ICCEES)に代表権を得ていない中国と韓国のスラブ・ユーラシア学会にたいして、本COEの中心的メンバーであり、かつ世界学会執行委員である松里公孝教授が橋渡しをして、正式な加盟が実現する方向にある。

5. 国際中欧・東欧学会(ICCEES)の理事会を招聘して札幌で研究動向に関するシンポジウムを開催し、その成果をO. Ieda ed., *Where Are Slavic Eurasian Studies Headed in the 21st Century?* ii+75, SRC, Sapporo, 2005としてまとめた。

6. 北大、札幌がスラブ・ユーラシア研究の情報源として世界に周知されるようになった。すなわちSRCのホームページは、数年前にはすでに「スラブ研究における最良のHP」と全米スラブ学会(AAASS)のニューズレターに評価されていたが、COE期間中を通して、1日平均アクセス数は約8千から約1万3千に増大した。

6) 国内外に向けた情報発信

1. 本COEの欧文シリーズSlavic Eurasian Studiesなど全体で30冊の欧文出版物が刊行され、その大半が欧米の一流誌に書評された。

2. 事業推進員により、8冊の単著(欧文3、邦文5)、62冊の編著(欧文30、邦文32)、17本の欧文査読論文、46本の欧文非査読論文、13本の邦文査読

論文、51本の邦文非査読論文が発表された。

3. 事業推進者だけでなく、全国の研究者を国際的な研究の場に巻き込んだ。COE期間中、SRC専任研究員以外の日本人研究者による85本の欧文論文、155本の国際口頭報告を組織していることは、全国共同利用施設の重大な任務である「日本の研究を国際化する」課題を最大限に果たしているものと評価できる。

4. 約17万タイトルあるスラブ・コレクションの一層の充実に努力した。ウクライナ語をはじめとするスラブ語の世界最大規模のコレクションであるシェヴェロフ・コレクションの整理が完了し、海外からも利用希望が殺到している。21世紀COE以前に購入したソ連共産党中央委員会・国際部文書が利用され、ソ連外交史の貴重な研究書が2冊出版された。地図のデジタル化を進めるなど、利用の簡便化にも心を砕いた。

7) 拠点形成費等補助金の使途について（拠点形成のため効果的に使用されたか）

1. 初年度を除けば補助金の大半（7－8割）を人件費（研究員の雇用など）と旅費（研究会の実施や調査旅費）に割り当て、若手研究者が研究に専念し、必要な現地調査ができるように配慮した。
2. 旅費については拠点の国際性を高めるため、国際シンポジウムなどで必要となる外国旅費を優先して割り当てた。
3. 事業推進者には当初配分は行わず、必要に応じて予算を割り当てた。若手研究員にも当初配分は最小限とし、研究活動実績を見て必要な予算の追加を行った。
4. 航空券代金などで計画的に予定できるものは割引料金を使うなど、節約に努めた。
5. 数多くの出版を確保するため、品質を落とさないまま低価格で引き受ける印刷業者を発掘した。

②今後の展望

1. ITPに採択され、ポスドク研究者を提携研究所であるハーヴァードのデイヴィス・センター、ウッドロウ・ウィルソン・センター・ケナン研究所、オックスフォード大学聖アントニー校に10ヶ月間送り、博士論文の内容を迅速に英語化させると同時にこれら提携校との共同研究の先頭に立たせる予定である。
2. 学術英語研修事業の成功にのっとり、Slavic Review、Europe-Asia Studies のような一流査読誌

の編集長を招き、また先輩研究者が投稿経験談を語るような研修会を開くことになった。

3. SRCは、伝統的な現地（旧ソ連東欧）、欧米との協力に加えて、東アジア、中東などとの研究協力実績を有する点が特徴である。次のGCOEにおいては、中国、韓国、インド、イラン、トルコ、バルカン、北欧など新境界地域に属する国々との研究協力をいっそう推進する。特に中国・韓国・モンゴルとの協力関係を重視し、東アジアにおける研究者コミュニティを形成する。

4. 他大学の院生のためGCOEにおいては、従来個別に実績を上げてきた鈴川・中村（旧COE=鈴川）国内留学制度、国際若手ワークショップ、大学院共通授業、マイナー言語の集中講義などを結合して短期・中期のトレーニング・プログラムを構築する。

③その他（世界的な研究教育拠点の形成が学内外に与えた影響度）

1. 本COEは地域研究を北大文系のトレードマークとする上で大きな意味を持った。また地域研究の重視は、国際性と応用性という北大の校是にもかかっている。

2. SRCは、日本の地域研究者のナショナル・センターである地域研究コンソーシアムに会長を出していることにも示されるように、スラブ研究だけでなく日本の地域研究組織が全体として全国共同利用型活動を重視する方向へ転換するようインパクトを与えた。

3. SRCは、研究者コミュニティの形成、若手育成、共同研究、世界学会ICCEESとの仲立ちなどにおいて日本だけではなく東アジア全体に奉仕する共同施設になりつつあるが、本COEはこの傾向を決定づけた。これは「北大をアジアの拠点大学へ」という大学の次期中期目標に合致している。

4. 方法的には人文地政学(cultural geopolitics)という地域研究の新しい総合分析の方法を打ち出し、理系との協働可能性や人文社会科学を顕著に発展させる起爆剤になりつつある。同時にこれは、欧米にはない日本独自のアプローチであり、日本の地域研究の国際競争力を短期間で顕著に高める効果がある。

21世紀COEプログラム 平成15年度採択拠点事業結果報告書

機 関 名	北海道大学	拠点番号	J02
拠点のプログラム名称	スラブ・ユーラシア学の構築: 中域圏の形成と地球化 (Making a Discipline of Slavic Eurasian Studies)		
1. 研究活動実績			
①この拠点形成計画に関連した主な発表論文名・著書名【公表】			
・事業推進担当者（拠点リーダーを含む）が事業実施期間中に既に発表したこの拠点形成計画に関連した主な論文等〔著書、公刊論文、学術雑誌、その他当該プログラムにおいて公刊したもの〕 ・本拠点形成計画の成果で、ディスカッション・ペーパー、Web等の形式で公開されているものなど速報性のあるもの ※著者名（全員）、論文名、著書名、学会誌名、巻(号)、最初と最後の頁、発表年（西暦）の順に記入 波下線（ ）：拠点からコピーが提出されている論文 下線（ ）：拠点を形成する専攻等に所属し、拠点の研究活動に参加している博士課程後期学生			
家田修(編集代表)『講座 スラブ・ユーラシア学』全三巻(1:家田修(編)『開かれた地域研究へー中域圏と地球化ー』、2:宇山智彦(編)『地域認識論ー多民族空間の構造と表象ー』、3:松里公孝(編)『ユーラシアー帝国の大陸』)、講談社、2008			
Ieda, Osamu, "Ideological Background of the Amendment States Law Controversy in Hungary," <i>Central European Political Science Review</i> 5(16), 7-28, 2005			
Ieda, Osamu, "Regional Identities and Meso-Mega Area Dynamics in Slavic Eurasia: Focused on Eastern Europe," <i>Regio</i> 4, 3-22, 2004			
Ieda, Osamu, "Post-communist Nation Building and the Status Law Syndrome in Hungary," in <i>The Hungarian Status Law: Nation Building and/or Minority Protection</i> , 3-57, Sapporo: Slavic Research Center, 2004			
家田修「ハンガリーにおける新国民形成と地位法の制定」『スラブ研究』51号、157-207、2004			
Tabata, Shinichiro, "The Russian Stabilization Fund and Its Successor: Implications for Inflation," <i>Eurasian Geography and Economics</i> 48(6), 699-712, 2007			
Tabata, Shinichiro, "Observations on the Influence of High Oil Prices on Russia's GDP Growth," <i>Eurasian Geography and Economics</i> 47(1), 95-111, 2006			
田畑伸一郎「ロシア経済構造の変容(1991~2005年)」『経済研究』57(2)、136-150、2006			
Tabata, Shinichiro, "Observations on Changes in Russia's Comparative Advantage, 1994-2005," <i>Eurasian Geography and Economics</i> 47(6), 747-759, 2006			
田畑伸一郎『CIS: 旧ソ連の再構成』国際書院、2004			
Matsuzato, Kimitaka, "Muslim Leaders in Russia's Volga-Urals: Self-Perceptions and Relationship with Regional Authorities," <i>Europe-Asia Studies</i> 59(5), 777-803, 2007			
Matsuzato, Kimitaka, "Differing Dynamics of Semipresidentialism across Euro/Eurasian Borders: Ukraine, Lithuania, Poland, Moldova and Armenia," <i>Demokratizatsiya</i> 14(3), 317-345, 2006			
Matsuzato, Kimitaka & Magomed-Rasul Ibragimov, "Islamic Politics at the Subregional Level of Dagestan: Tariqa Brotherhoods, Ethnicities, Localism and the Spiritual Board," <i>Europe-Asia Studies</i> 57(5), 753-779, 2005			
Мацузато Кимитакa. Генерал-губернаторства в Российской империи: от этнического к пространственному подходу // Новая имперская история постсоветского пространства. Под ред. И. Герасимов и др. Казань. 427-458, 2004			
Matsuzato, Kimitaka, "Authoritarian Transformations of the Mid-Volga National Republics: An Attempt at Macro-Regionology," <i>Journal of Communist Studies and Transition Politics</i> 20(2), 98-123, 2004			
Tetsuo Mochizuki(ed.), <i>Beyond the Empire: Images of Russia in the Eurasian Cultural Context</i> (in Russian and English), Sapporo: Slavic Research Center, 2008			
望月哲男「ロシアの空間イメージによせて」松里公孝(編)『講座 スラブ・ユーラシア学3 ユーラシアー帝国の大陸』講談社、139-176, 2008			
望月哲男(編著)『創像都市ペテルブルグ: 歴史・科学・文化』[スラブ・ユーラシア叢書2]北海道大学出版会、2007			
Mochizuki, Tetsuo, "The Perception of Dostoevsky by Contemporary Russian Writers: Reminiscences, Stylizations and Remakes," in Halina Janaszek-Ivanickova (ed.), <i>The Horizons of Contemporary Slavic Comparative literature Studies</i> , Warszawa: Dom Wydawniczy ELIPSA, 109-121, 2007			
望月哲男「19世紀ロシア文学におけるイエズス会のイメージ:『カラマゾフの兄弟』読解へのステップ」『19世紀ロシア文学という現在』(21世紀COEプログラム「スラブ・ユーラシア学の構築」研究報告集No.10)スラブ研究センター、33-52, 2005			
林忠行「戦略としての地域ー世界戦争と東欧認識をめぐる」家田修(編)『講座 スラブ・ユーラシア学1 開かれた地域研究へー中域圏と地球化』講談社、91-118、2008			
Hayashi, Tadayuki, "Masaryk's 'Zone of Small Nations' in His Discourse during World War I," in Tadayuki Hayashi & Hiroshi Fukuda (eds.), <i>Regions in Central and Eastern Europe: Past and Present</i> , Sapporo: Slavic Research Center, 3-20, 2007			
Hayashi, Tadayuki, "EU Enlargement and Euroscepticism in Central and Eastern Europe: The ODS in the Czech Party System," in Alexander Duleba & Tadayuki Hayashi, eds., <i>Regional Integration in the East and West: Challenges and Responses</i> , Bratislava- Sapporo: SFPA-SRC, 75-84, 2005			
林忠行「東中欧諸国と米国の単独主義ーイラク戦争への対応を事例に」『ロシア・東欧学会年報』33, 47-58, 2005			
Hayashi, Tadayuki, "'Neoliberals' and Politics of Economic Transformation in the Post-Communist Czech Republic," in Tadayuki Hayashi (ed.), <i>Democracy and Market Economics in Central and Eastern Europe: Are New Institutions Being Consolidated?</i> , Sapporo: Slavic Research Center, 129-147, 2004			
Akihiro Iwashita and Adam Eberhardt (eds.), <i>Security Challenges in the Post-Soviet Space: European and Asian Perspectives</i> , Warsaw: The Polish Institute of International Affairs, 2007			
Akihiro Iwashita, <i>Eager Eyes Fixed on Eurasia</i> , Vol.1~2, Sapporo: Slavic Research Center, 2007			
Акихиро Ивасита, 4000 километров проблем: российско-китайская граница. Москва: Восток-Запад, 2006			

岩下明裕(編)『国境・誰がこの線を引いたのか: 日本とユーラシア』[スラブ・ユーラシア叢書1]北海道大学出版会、2006
 岩下明裕『北方領土問題: 4でも0でも2でもなく』中公新書、2005

Tomohiko Uyama (ed.), *Empire, Islam, and Politics in Central Eurasia*, Sapporo: Slavic Research Center, 2007

宇山智彦「クルグズスタン(キルギス)の革命—エリートの離合集散と社会ネットワークの動員—」藤森信吉・前田弘毅・宇山智彦(編)『「民主化革命」とは何だったのか: グルジア、ウクライナ、クルグズスタン』(21世紀COEプログラム「スラブ・ユーラシア学の構築」研究報告集No.16)、41-77、2006

宇山智彦「「個別主義の帝国」ロシアの中央アジア政策: 正教化と兵役の問題を中心に」『スラヴ研究』53、27-59、2006

小松久男・梅村坦・宇山智彦・帯谷知可・堀川徹(編)『中央ユーラシアを知る事典』平凡社、2005

岩崎一郎・宇山智彦・小松久男(編著)『現代中央アジア論: 変貌する政治・経済の深層』日本評論社、2004

荒井信雄「クリル諸島社会経済発展連邦プログラム」『北海道地方自治研究』3-10、2007

Maeda, Hirotake, *K'art'velebi Sep'iant'a Iranshi*, Tbilisi: Artanuji, 2008

Maeda, Hirotake, "The Forced Migrations and Reorganisation of the Regional Order in the Caucasus by Safavid Iran: Preconditions and Developments Described by Fazli Khuzani," in Osamu Ieda and Tomohiko Uyama (eds.), *Reconstruction and Interaction of Slavic Eurasia and Its Neighboring Worlds*, Sapporo: Slavic Research Center, 237-273, 2006

前田弘毅(編著)(北川誠一、廣瀬陽子、吉村貴之氏と共編著)『コーカサスを知るための60章』明石書店、2006

前田弘毅「シャー・アッバース一世の対カフカス政策—「異人」登用の実像—」『史学雑誌』113(9)、1-37、2004

Wolff, David, "Cultural and Social History on Total War's Global Battlefield," *Russian Review* 67, 70-77, 2008

ウルフ、デイヴィッド(左近幸村訳)「地域から地球規模へ: 商品としての大豆の20世紀史」『Global History and Maritime Asia Working Paper Series』6、1-14、2007

Wolff, David, "The KGB Reports from Lithuania," *Acta Slavica Iaponica* 23, 219-240, 2007

Wolff, David, Steven Marks, Bruce Menning, David Schimmelpenninck John Steinberg and Yokote Shinji, *World War Zero: The Russo-Japanese War in Global Perspective*, Volume II, Leiden: Brill, 2007

Morimoto, Kazuo, "A Preliminary Study on the Diffusion of the Niqāba al-Ṭālibīyīn: Towards an Understanding of the Early Dispersal of Sayyids," in Hidemitsu Kuroki (ed.), *The Influence of Human Mobility in Muslim Societies* (Islamic Area Studies Series), London, New York, Bahrain: Kegan Paul Intl., 3-42, 2003

村上隆『北樺太石油コンセンション 1925-1944』、北海道大学図書刊行会、2004

原暉之「巨視の歴史と微視の歴史: 『アムール現地総合調査叢書』(1911~1913)を手がかりとして」『ロシア史研究』76、50-66、2005

山村理人「スラブ・ユーラシアにおける農業問題と地球化—旧ソ連諸国のWTO加盟問題をめぐって」家田修(編)『講座スラブ・ユーラシア学1 開かれた地域研究へ—中域圏と地球化』講談社、244-269、2008

佐々木隆生「ステイトとネーション(9)—近代国民国家と世界経済の政治経済学」『北海道大学経済学研究』54(3)、1-21、2004

佐々木隆生「ステイトとネーション(8)—近代国民国家と世界経済の政治経済学」『北海道大学経済学研究』54(2)、1-28、2004

橋本聡「多言語性をどうマネージメントするか? EU言語政策の最新動向」『言語と社会の多様性(大学院メディア・コミュニケーション研究院研究叢書)』69、95-158、2008

Klema, Barbara & Satoshi Hashimoto, "Sprachenpolitische Entwicklungen in Europa und Japan: Literaturempfehlungen zu Sprachenpolitik, Referenzrahmen und Currirulum," *Japanische Gesellschaft für Germanistik "Neue Beitrage zur Germanistik"* 6(2), 153-186, 2007

Klema, Barbara & Satoshi Hashimoto, "<Englisch ist wichtig, Chinesisch ist nuetzlich in Zukunft, Deutsch ist schwierig> Argumente fuer den L3-Unterricht an japanischen Hochschulen," *Zeitschrift für Interkulturellen Fremdsprachenunterricht* 12(1), 1-26, 2007

Hashimoto, Satoshi, "Foreign Language Education in Japan: A Domestic Perspective on Plurilingual Education"『大学院国際広報メディア研究科・言語文化部紀要』52、87-100、2007

橋本聡「Felix Vodikaの19世紀チェコ文学研究」『学習院大学ドイツ文学会研究論集』8、217-230、2004

所伸一「1931年党中央委決定前夜のロシアにおける「学校ポリテフニズム化」政策」『北海道大学大学院教育学研究科紀要』91、1-24、2003

山下範久「はじめに—帝国論の中間決算のために」/「帝国化する世界システム—『長い20世紀』とその帰結」山下範久(編)『帝国論』講談社(選書メチエ)、4-14/207-238、2006

Yamashita, Norihisa, "Empire or Post-Empire?: the Concept of 'Long Century' and the Consequences of Globalization," in Kimitaka Matsuzato (ed.), *Emerging Meso-Areas in the Former Socialist Countries: Histories Revived or Improvised?* Sapporo: Slavic Research Center, 335-348, 2005

吉野悦雄・塩谷昌史「ベラルーシ企業調査報告」『経済学研究』57(2)、41-61、2007

吉野悦雄・塩谷昌史・田畑理一「ロシア・ブスコフ市企業調査報告」『経済学研究』57(3)、61-80、2007

吉野悦雄「ルカシェンコ政権下におけるベラルーシの市場経済化とその促進要因」『比較経済研究』43(1)、25-37、2006

Yoshino, Etsuo, Higher Education of Lithuanian families abroad inthe XX century, *Studium Vilnensis A 2*, 187-190, 2006

吉野悦雄「バルト三国」西村可昭編『ロシア・東欧経済』日本国際問題研究所、29-54、2004

栗生沢猛夫「中世ロシアの法文化とモンゴル支配」栗生沢猛夫編『中世ロシアの法と社会』(21世紀COEプログラム「スラブ・ユーラシア学の構築」研究報告集No.24)、1-24、2008

栗生沢猛夫『タタールのくびき—ロシア史におけるモンゴル支配の研究』東京大学出版会、2007

栗生沢猛夫「ビョートル一世とサンクト・ペテルブルグの誕生」望月哲男(編)『創造都市ペテルブルグ』北海道大学出版会、17-38、2007

栗生沢猛夫「アレクサンドル・ネフスキー—史料の検討(上)(下)」『西洋史論集』6、63-106、2003/7、1-71、2004

杉浦秀一「ウラジーミル・ソロヴィヨフとオカルティズム」『スラヴ研究』52、177-204、2004

杉浦秀一「ロシアプラトニズムとウラジーミル・ソロヴィヨフ」『プラトンとロシア』(21世紀COEプログラム「スラブ・ユーラシア学の構築」研究報告集No.12)、1-15、2006

②国際会議等の開催状況【公表】

(事業実施期間中に開催した主な国際会議等の開催時期・場所、会議等の名称、参加人数(うち外国人参加者数)、主な招待講演者(3名程度))

【夏期・冬期 大型国際シンポジウム 一覧】

開催日	場所	会議の名称	参加人数	主な招待報告者(外国人)
2004. 1.28-31	札幌	「旧社会主義諸国に出現しつつある中域圏:歴史は甦りつつあるのか、それとも創作されているのか?」	134 (20)	ヴェロ・ペッタイ(タルトゥ大学)、マゴメド・ラスール・イブラギーモフ(ダゲスタン大学)、スタニスラフ・ラコバ(アブハジア大学) 他17名
2004. 7.14-16	札幌	「21世紀のシベリア・極東:「アジア共同体」のパートナー」	172 (17)	バレーリー・クレショフ(ロシア科学アカデミーシベリア支部)、ギルバート・ロズマン(プリンストン大学)、ペク・クヌク(英国王立研究所) 他13名
2004. 12.8-10	札幌	「スラブ・ユーラシアと隣接世界の再編」	89 (13)	ヘンリー・ヘイル(インディアナ大学)、クラウス・ゼグベルス(ベルリン自由大学)、アレクセイ・ヴォスクレセンスキー(モスクワ国際関係大学) 他7名
2005. 7.7-9	札幌	「中央ユーラシアの地域的・超域的ダイナミズム:帝国、イスラーム、政治」	131 (11)	アディーブ・ハーリド(カールトン・カレッジ)、マンベト・コイゲルディエフ(カザフスタン教育科学省歴史・民族学研究所)、アレクサンドル・マルカロフ(エレヴァン大学) 他6名
2005. 12.14-16	札幌	「中・東欧の地域:過去と現在」	117 (9)	ベルティ・ヨエンニエミ(デンマーク国際学研究所)、エイキ・ベルグ(タルトゥ大学)、アントニス・リアコス(アテネ大学) 他5名
2006. 7.6-7	札幌	「スラブ・ユーラシアへの視線:変化と進歩」	130 (18)	マーサ・オルコット(カーネギー基金)、ニルマラ・ジョシ(インド・中央アジア基金)、ファルホド・トリポフ(ウズベキスタン国立大学) 他11名
2006. 12.13-15	札幌	「帝国を超えて:ユーラシア文化のコンテクストにおけるロシアのイメージ」	109 (16)	ハーシャ・ラム(カリフォルニア大学)、ツイピルマ・ダリエヴァ(フンボルト大)、イリーナ・ノヴィコヴァ(ラトヴィア大) 他9名
2007. 7.6-7	札幌	「スラブ・ユーラシアと隣接世界におけるエネルギーと環境の問題」	129 (19)	マッシュー・セガーズ(ケンブリッジ・エネルギー研究所)、マッシュール・ゴールドマン(ハーバード大学)、モハンマド・ハッサン・ハニ(イマム・サディク大学) 他10名
2007. 12.5-7	札幌	「アジア・ロシア:地域的・国際的文脈の中の帝国権力」	86 (13)	マイケル・ホダルコフスキー(シカゴ・ロヨラ大学)、ロバート・クルーズ(スタンフォード大学)、サラヴァト・イスハコフ(ロシア科学アカデミーロシア史研究所) 他10名

【主な中規模国際シンポジウム】*参加者数はパネリストのみ

2004. 5.27	札幌	国際中欧・東欧学会研究会「21世紀スラブ・ユーラシア研究の行方」	9(8)	ジョージ・ミンク(ソルボンヌ大学)、トーマス・ブレマー(ミュンスター大学)、レナ・ジョンソン(スウェーデン国際問題研究所) 他5名
2004. 10.14-16	ブダペスト	「地位法症候群:共産主義後の国民形成それともポスト近代的市民権」	25 (23)	アミダブ・シング(インド、ジャワラール・ネフル大学)、ヌルジャン・オズギョル・バクラジュオウル(イスタンブール大学)、ウォルター・ケンプ(欧州安全保障・協力機構事務局) 他20名
2005. 11.11-12	サハリン	「日本とロシアの研究者の目から見るサハリン・樺太の歴史」	13 (9)	E.H.リツツィナ(サハリン国立大学)、M.B.テチュエワ(サハリン国立大学)、J.I.B.ドラグノワ(サハリン州国立文書館) 他6名
2006. 9.11-12	ワルシャワ	“Security Challenges in the Post-Soviet Area from the East and West Perspectives”	20 (15)	スラヴォミル・デブスキ(ポーランド国際問題研究所)、アルカージェ・モシエス(フィンランド国際問題研究所)、エンノ・ハルクス(ドイツ国際安全保障問題研究所) 他12名
2007. 4.12-13	ワシントンD.C.	U.S.-Japan Dialogue on Russia and Northeast Asia Security	12 (6)	マイケル・ヤフダ(LSE)、ジョン・フェッター(FSIエナジー)、アンドリュー・クッチングス(戦略国際研究センター) 他3名
2007.5.9	札幌	「東北アジアの地域協力:ロシアとエネルギー要因」	17 (8)	イ・ジュフム(韓国外交安保研究院)、チェ・ウォンギ(外交安保研究院)、コ・ジェナム(外交安保研究院) 他5名
2007. 9.22	東京	国際ワークショップ「日本のシルクロード外交」	12 (3)	クリストファー・レン(CACI & SRSP)、エリカ・マラート(CACI & SRSP)、ニコライ・スワンストロム(CACI & SRSP)

その他、ヴラチスラヴァで1回、ソウルで1回、札幌で12回、東京で2回、京都で2回、大阪で1回の中規模国際シンポジウムを開催・共催した。また、2005年にはベルリンの国際中欧・東欧学会世界大会で4パネル、米国スラブ学会年次大会では、2005年(ワシントンD.C.)・2006年(ワシントンDC)・2007年(ニューオーリンズ)の米国スラブ学会年次大会で、それぞれ3・3・4パネルを組織した。

2. 教育活動実績【公表】

博士課程等若手研究者の人材育成プログラムなど特色ある教育取組等についての、各取組の対象（選抜するものであればその方法を含む）、実施時期、具体的内容

【1】21世紀COE研究員プログラム: 博士号取得者、それに準ずる者を対象として、原則任期2年で公募により採用。センターの会議・出版などに参加する他、COE研究員セミナーでの研究報告を義務とする。

阿倍賢一、大野成樹、越野剛、後藤正憲、井澗裕、藤森信吉、飯尾唯紀、毛利公美、福田宏、永山ゆかり、荒井幸康、長尾広視、志田恭子、赤尾光春、大串敦、菊田悠、長縄宣博、青島陽子 計18名

【2】COE＝鈴木奨励研究員プログラム: 他大学の大学院生を対象に、1～2週間のスラブ研究センターでの研究を支援。公募によって採用。滞在期間中の研究報告を義務とする。

安達大輔、道上真有、井手康仁、井上まどか、大山麻稀子、長縄宣博、平松潤奈、福岡加容、松本かおり、宮川絹代、Svetlana Vassiliouk、Eduard Baryshev、乾雅幸、中地美枝、玄承洙、八木君人、生田真澄、木寺律子、Yaroslav Shulatov、角田耕治、長島大輔、村上亮、奥彩子、笠谷知美、佐藤圭史、島田智子、地田徹朗、山田徹也 計28名

【3】院生助成プログラム: 「北海道大学大学院に在籍する学生で、スラブ・ユーラシア学に関連する領域を専攻する者」を対象。公募によって採用。

①**大学院生海外渡航助成:** 往復の旅費と10日間の宿泊日当を上限として支給

全20件（モスクワ、エリスタ（カルムイク）、モスクワ等、ハバロフスク等、ウラジオストク、モスクワ等、ペテルブルク、イルクーツク等、ジュネーブ、モスクワ、ボリビア、モスクワ、ウラジーミル等、モスクワ等、ウラジオストク、バクー、北京等、クラクフ等、モスクワ、サンクト・ペテルブルク等）

②**国内研究旅行助成:** 資料収集のため、原則として1週間以内の国内研究旅行の旅費・宿泊日当を支給
全5件（外交史料館等、アジア経済研究所、静岡大学、国立民俗学博物館図書室、天理大学附属天理図書館等）

③**学会報告助成:** 国内外の著名な学会で報告する場合のみ。往復の旅費と1泊2日分の宿泊日当を支給
全36件（日本中央アジア学会、日本人口学会、日本移民学会、国際アルタイ学会（ソウル）2件、日本ロシア文学会5件、日本言語学会2件、日本西洋史学会、ロシア哲学学会（モスクワ）、日本人口学会、ロシア・東欧学会2件、ロシア史研究会、日本オリエント学会、日本ロシア文学会2件／「文明の歴史におけるヒエラルヒーと権力の問題」国際学会（モスクワ）、社会経済史学会、クリミア国際ヴォロソフ研究会（モスクワ、シンフェロポリ）、日本ロシア文学会4件、比較経済体制学会、ロシア・東欧学会、近現代東北アジア地域史研究会大会、日本アジア学会／比較経済体制学会、石油・天然ガス資源国際博士生フォーラム（中国北京）、中央ユーラシア学会（シアトル）、ロシア・東欧学会／JSSEES）

【4】COE 日本学術振興会特別研究員: 北海道大学大学院の博士課程の院生から特に成績優秀な者に対し、日本学術振興会特別研究員(DC)に準ずる助成を行う。

天野尚樹（平成15－16年度）、志田恭子（平成16年度）、河原法子（平成17年度）、秋山徹（平成18年度）

【5】若手研究者企画シンポジウム: 若手研究者（研究員、院生）による自主企画の大型シンポジウム。

(1) 「Russia as a Regional Power: Its International Status and the Elections in 2007-2008」(2007年2月22－23日:スラブ研究センター／学術振興会研究員 大串敦 企画) 全5セッション、報告者15名（うち外国人7名）

(2) 「ロシアの中のアジア／アジアの中のロシア (Asia in Russia / Russia in Asia 略称AIRRIA)」(2007年3月9－10日:スラブ研究センター／北海道大学大学院博士課程 左近幸村 企画) 全6セッション、報告者15名

(3) 「21世紀総括シンポジウム:スラブ・ユーラシア学の幕開け 第二日目:「次世代の挑戦」」(2008年1月25日:東京神田学士会館／スラブ研究センター研究員 青島陽子、志田恭子、赤尾光春、准教授 長縄宣博 企画) 全3パネル、報告者9名

【6】国際若手研究者ワークショップ: 夏期冬期国際シンポジウムに合わせて開催される。報告者は原則として英文論文を公募にもとづき、選抜される。

2004年1月31日 第一回国際若手ワークショップ:全3セッション、報告者9名（うち外国人4名）

2004年12月11日 第二回国際若手ワークショップ:全4セッション、報告者11名（うち外国人4名）

2006年7月5日 第三回国際若手ワークショップ:全2セッション、報告者6名（うち外国人2名）

2007年7月4日 第四回国際若手ワークショップ:全2セッション、報告者7名（うち外国人4名）

2007年12月5日 第五回国際若手ワークショップ:全1セッション、報告者3名（うち外国人2名）

【7】アカデミック英語セミナー: 若手研究者を対象にアカデミックな英語の訓練を行うセミナー

2008年3月10～22日 真駒内青少年会館にて 英語による報告・討論の訓練、CV・ハンドアウト・要約などの書き方 学内外の大学院生・ポスドク研究員 18名参加（2008年5-6月英語査読雑誌に掲載される論文の書き方セミナーへ継続。）

21世紀COEプログラム委員会における事後評価結果

(総括評価)

設定された目的は十分達成された

(コメント)

拠点形成計画全体の目的達成度については、ソ連邦崩壊後のスラブ・ユーラシア地域全体を包括的に理解する枠組みを提示し、その理論的進化及び研究の国際化と若手研究者育成に実績をあげ、国際的認知も獲得しており、十分に目的を達成したと評価できる。

人材育成面については、21世紀COE研究員などの制度を活用しつつ、学内外、海外からの若手研究者に研究と国際化の機会を与え、若手研究者の国際交流と研究水準向上を達成しており、十分に目的を達成したと評価できる。

研究活動面については、定期的かつよく組織された国際シンポジウムの開催や国際学会でのパネル開催などを通じて研究成果の国際発信とフィードバックを実現し、地域研究の理論化に資する成果を公表しており、十分に目的を達成したと評価できる。

補助事業終了後の持続的展開については、本拠点形成計画実施中に達成された人材育成及び研究活動における実績から、十分期待することができる。大学には、人材育成の体制整備や国際的拠点の維持発展のために、更なる支援体制強化の取組を期待する。